

研究報告

鱗相より見た宅良川のヤマメと
アマゴについて

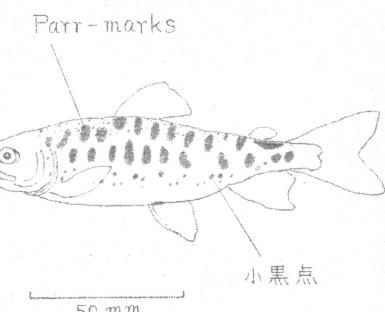
武生高等学校 五十嵐 清

イワナ、アマゴ、ヤマメは、清冽なけい流にすむ魚として特に人に親しまれている。県下淡水魚相を調査(1951~)すべく1958年は主として足かけい流に運んでみた。採集地は主として、今庄町宅良川及び九頭龍川最上流池ヶ島附近である。溪流に上るに従い、アユのすむ荒瀬を過ぎ、所謂渓谷にさしかかるとそこにアユに代ってアマゴ、アマメ、イワナのせい息が見られる。採集地宅良川では、瀬戸附近の細流と、小倉谷を縫う多留美川である。土地の子供達は、アマゴと呼んでのぞきで夢中に獲っていた。じっと岩影にひそむアマゴの姿は、まさに端麗そのままである。土地の人々がアマゴと呼ぶこれらの魚が、果してアマゴであるかどうか、私には数年来納得出来ず、大きな疑問のままで残され、せい息地の状況と形態に特に注意を払っていた。

田中茂穂博士(1936)はアマゴをヤマメの一異型であるとして、すべて *Salmo milkt-schits* MALBAUM の一種にまとめて一つにしている。果してそうであろうか。アマゴと称しているものの中に、似て非なるものがあるようと思えてならない。又大島正満博士(1957)はその著『サクラマスとビワマス』の中にアマゴとヤマメの二つの相違点を明かに指摘され、ヤマメはサクラマスの、アマゴはビワマスの陸封型、幼魚型であると力説されているが、福井県産アマゴの場合も或いはヤマメとの混同によるのであるまいか。入手した材料をもとにして、大島博士の説に従い、これ等の点を明かにして行きたい。

博士は両者の相違点を、形態より明かにすることが出来うると次のようにいっている。

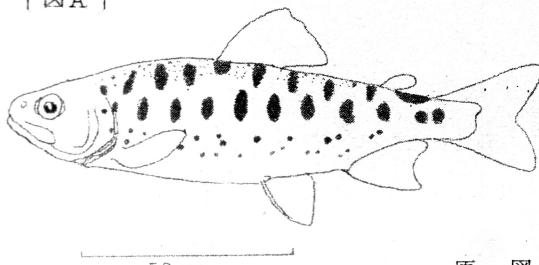
- (a) Parr-marks の並列と小黒点朱点の在否をあげている。即ちヤマメでは Parr-marks の散在並列が見られるが、腹部に朱点がなく、やや黒色斑点が散在して、清躰な感じを与える。それに比べてアマゴは 7~10 個の Parr-marks の外、小黒点



の点在と、朱点が散在し、殊に。

〔図A〕

幼魚の時期では鮮明である。



- (b) 鱗相上の相違点から両者は明かに相異すると指摘している。

即ちヤマメの鱗相で鱗の成長線は中央の10個内外のみ完全な同心円で、他は悉く半円形であるが、アマゴの鱗は生長線はこれも完全な同心円をなし周縁に近くあるもののみ外縁で切断されている。

- (c) 分布上の相違点を次のように述べている。

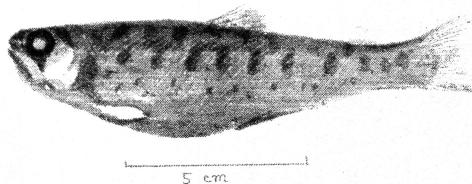
即ちヤマメの分布は北海道、東北、関東の全部と中部近畿では日本海に注ぐ河川のみで太平洋方面の河川には見られない。これに反してアマゴは、中部近畿、四国、九州地方の太平洋に注ぐ河川にのみせい息し、両者の分布区域が判然と区別されている。(大島1957、大柳1957)

扱て宅良川で得た通常アマゴと称されているものを、以上のa～cの点で比較考察してみると次のようである。

1. Parr-marksではこれも極めて良く類似し、朱点は全く見られない。瀬戸で得た図Aでも、小倉で得た図Bでもこの両者を一方をヤマメ、他方をアマゴと断定することはむずかしい。

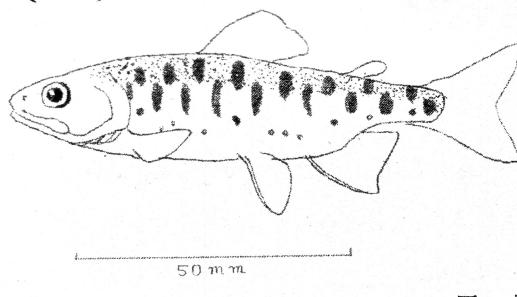
2. 鱗相より比較検討してみると、歴然

原 図

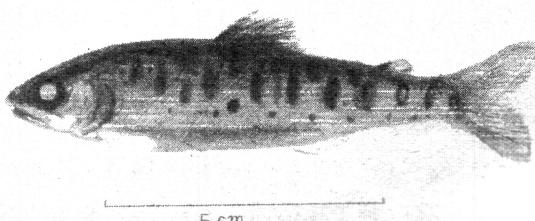


瀬戸にて採集

〔図B〕



原 図



小倉谷にて採集

(研)

と両者の間に相違のあることが解る。図Cは、ヤマメの鱗相を、図Dはアマゴの鱗相を示しているからである。即ち図Cで明かなように、鱗の生長線の後部に同心円の破線が見られ、図Dでは、生長線の同心円的環状が見られる。朱点をもったアマゴの典型的タイプの池ヶ島のものの鱗相と全く同一型である。Parr-marksではそ
の区別がし難いと一応述べたが、図Aより得た鱗C
よりAはヤマメと説明がつき、図Bより得た鱗DよりBはアマゴと推定し得る。

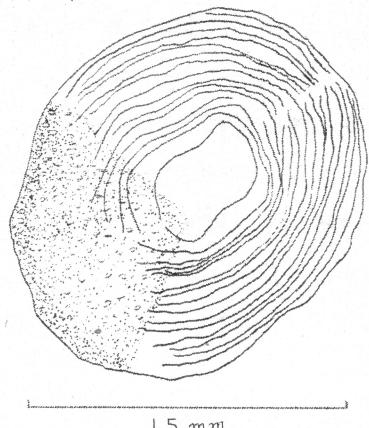
3. 分布上より考察すると、大島、青柳博士の指摘する日本海方面に注ぐ河川には、アマゴは見られずとする分布の問題では、福井県の場合当っていいと思われる。

然し一説にアマゴの移植をかけて試みたとも言われているので、宅良川に見られるヤマメ、アマゴのせい息も、或はそうした事情の所産であるかも知れない。大島(1957)は、太平洋岸神奈川県酒匂川では、アマゴとヤマメの混せいを認めているが、その場合アマゴは、その特徴である朱点が鮮明であると報告している。

本県でアマゴと通常称しているものを鱗相から見ると、アマゴ一種ではなくてヤマメのParr-marksを備えたアマゴらしくないアマゴと、本来のヤマメとの混せいがあるようと思われる。

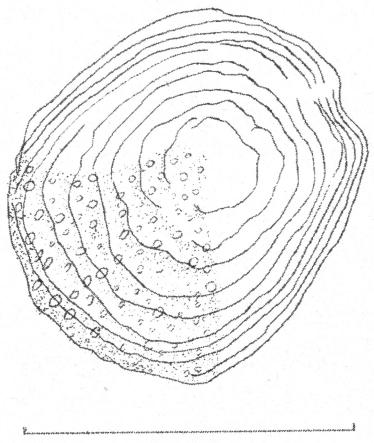
尚、大島は、サクラマスの♀と、ビワマスの♂との交配によって得たものでは鱗相にアマゴの特徴を示しParr-marksにヤマメの特徴をもち、朱点は影をひそめた形になるといっているが、宅良川で得たアマゴらしくないアマゴといった図Bは、或いは自然交配によって得た種であるのかも知れない。改めて採集吟味してみたいと思っている。

[図C]



ヤマメの鱗 原図

[図D]



アマゴの鱗 原図

又私の採集では、ヤマメ *Oncorhynchus masou* のせい息が瀬戸附近の細流であり、アマゴ *Orhodus* のせい息が小倉谷の多留美川であることから、或いは河川によつてすみわけをしているのではないかと思われる。

〔図E〕



イワナの鱗 原図

〔図F〕



アマゴの鱗のき型 原図

終りに、イワナの鱗相図E及びアマゴの二鱗融合したき型鱗図Fを附記しておいた。

福井県地方の衛生上有害な動物について

(その4) 患虫及び患虫病

福井県衛生研究所 福島俊定

患虫は、本来野鼠の寄生虫であり、患虫病も鼠間に広がっている伝染病であつて、人間も野鼠のせい息地に立入る事によって同じ病気にかかり、治療法の進んでいなかつた時代には、そのために倒れた人も稀でなかつたようである。古くより信濃川、阿賀野川、雄物川、最上川の中流に沿つた一帯は、患虫の有毒地として恐れられていたが、そこでの病原体は *Rickettsia* であることと共に媒介者も一種判明していた。しかしその後急速に進められた研究によつて、患虫病は前記の地域以外にも相当広く存在するものであり、媒介者も一種のみでないことが明らかにされた。